通心４０号　　令和元年６月６日

未来志創

よっしゃ！頑張ろう！

昨日の５・６限に「社会に学ぶ『１４歳の挑戦』」で事業所に提出する自己紹介カードを書きました。その中で、多くの人が共通して書くのに困っている内容がありました。それは「自分の性格」についてです。こんな話があります。

患者：先生、痛いんです。
医者：どこが痛いの？
患者：どこを触っても痛いんです。
額を触っても、頬を触っても、足を触っても、お腹を触っても、耳を触っても痛い。
医者：そうか。君はね、指をけがしているんだと思うよ。

多くの人は、実は自分のことがよく分からないものなのです。私も教員採用試験を受けるとき、願書を書いたり、面接練習をしたりする中で一番悩んだのが「自分の長所」「自分の性格」でした。「自分の短所」ならいくらでも出てくるのに･･･。恥ずかしかったですが、何人もの友人に「俺の長所って何？」と聞きました。それくらい、自分のことが分からなかったです。さて今日は、ある庭師と桶の話です。

昔、ひとりの庭師がいました。彼は山の上に住んでいました。毎日、谷の下の川まで降りて、天秤棒の両端に水を満たした大きな桶をかけ、それを担いでまた庭がある山の上まで登っていきました。とても大変な仕事でしたが、彼は庭の世話が大好きで楽しんでいました。ある日、庭師はいつものように水をもって山を登っていると足を滑らせ、ひとつの桶に小さな穴ができてしまいました。
それから数カ月後のある晴れた日のこと。庭師が山のふもとで休憩していると、水が満杯に入った桶が穴のあいた桶に向かってこう言いました。
「お前はまったく役に立たないね」
「役に立たないって、どういう意味だ？」
「お前には穴があいている。毎日親方が一生懸命に我々を運んでも、お前のほうの水はこぼれてしまい、結局は半分しか運べていない。何の役にも立っていないよ」役に立っていないと言われ、穴のあいた桶はとても悲しくなりました。
次の日、穴のあいた桶は庭師にこう言いました。
「私はとても悲しいです」
「なぜ悲しいのだ？」
「私には穴があいています。あなたは私に水を満たして運びますが上に着くころには半分なくなっています」
そう聞いて庭師は言いました。
「それは本当だ。お前には穴があいている。でも、それがどういうことがわかるか？」
「自分に穴があいていることしかわかりません。穴があいていてはダメです。穴がなければ、私も水を一滴も漏らさず上まで運べます」と桶は答えました。すると庭師は
「お前は、私たちが通る道を見たことがあるか？たくさんの美しい花が咲いているだろう。あれは、お前のおかげなんだよ。お前に穴を見つけたとき、私は道に花の種をまいた。お前に穴があいているおかげで、私が水を運び上げるたびに、花の苗に水をやることができる。今ではきれいな花が咲き、ミツバチが蜜を求めてやってくる。一帯が見事な花園になっているんだよ」
桶はそう聞いて、とてもうれしい気持ちになりました。

『Pot with the Hole 穴の開いた桶』(Prem Rawat)

何が役に立って、何が役に立たないかは分かりません。同じように、自分には短所に感じられることでも、場合（人）によっては、長所になることもあるのです。だから安易に、「自分ではダメだ」と思わない（決めつけない）でくださいね。